

汚姉妹

―呪われた少女―

作・小佐部明広

【登場人物】

ハル …… おうちがない女の子。
アカリ …… ハルの妹
モモ …… 絵がへたな絵本かき。
ケイ …… うまくしゃべれない男。
ヤナギ …… お金持ち。
ユウタ …… ヤナギの息子。
ミーコ …… ヤナギの娘。

第一幕

オープニング

舞台上にいる人々。

背中を向けて泣いている女の子。

歌っている女の子。

眠っている男とその娘。

絵を描いている男の子。

泣いている女の子を見ている女。

それは、一枚の絵のようである。

その絵を見ている男、ケイ。

ケイ この絵、目の見えない人が描いたんです。

僕、この絵の前に立つと……涙が出てくるんです。

全員去り、絵本を持った女、モモだけが残る。

1. 森の魔法使い

モモ 森の奥深くは夜みたいだった。

空は木々に覆われ太陽を隠す。

海の近くの森には恐ろしい噂があった。
この森には、恐ろしい魔法使いが住んでいるらしい。

大きな鳥が大声で鳴きながら飛び立つ。

モモは悲鳴をあげる。

モモ 怖くない。私はもう泣き虫なんかじゃない。

……魔法使いにはいろんな噂があった。

森の迷宮から抜け出せなくなる、

空を飛ぶ大きな怪物を飼っている、

出会ったが最後、包丁で切られ鉄板で焼かれ

ひとつのこらず食べられてしまう。

……ははは、そんなやついるわけないね、

食えるもんなら食ってみろ！

突如として雷の音。

モモは悲鳴をあげる。

大雨が降ってくる。

モモ 泣くもんか泣くもんか！ 泣いてない！

これは雨でぬれてるだけだもん！

かかってこい、かかってこいよ魔法使い！

また雷の音。

モモは悲鳴をあげる。

ハルが立っている（その姿は影になってよく見えない）。

ハル 誰だ！

モモ ああ、ごめんなさい！

モモは走って逃げようとするが、足をひねって転んでしまう。

モモ やめて、食べないで！

ハルは近づいてきて、モモの足を手で押さえる。

モモ あ！

モモ、一巻の終わりかと思うが、

ハルがそれ以上にもしないことに気づく。

ハル 足動くか？

モモ え？

ハル 足！

モモ、さっきひねった足を動かしてみて、

モモ あ、痛くない……。

ハル よし、こっちだ！

ハル、モモを引っ張って連れていく。

モモ 私は謎の少女に、

大きな木の下まで連れていかれました。

その木の下には、一滴も雨は落ちてきませんでした。

ハル ここがあたしのおうちなんだ。

モモ 彼女はそう言うのと、どこからともなくパンを出してきました。

ハル 食べよ。

モモ ……ありがとう。

ハル で、お前誰だ？

モモ えと、私は、

ハル あたしはハル！ よろしくな！

モモ ああ、うん。私はモモ。

ハル モモか！ モモはどこから来たんだ？

モモ 村の方から来た。

ハル へー。森に遊びに来たんだな。

モモ ううん、家出。

ハル 家出？

モモ 私、絵本を書くのが好きなんだ。

将来は絵本作家になるんだ。

でも、お父さんが許してくれない。

ハル 絵本好きだぞ！

モモ ほんと？

ハル これか？

モモ そう、私が書いた絵本なの、読む？

ハル 読んであげる！

ハル、モモの持っている絵本を読む。

モモ どう？ どう？

ハル 絵、へただな！

モモ、寝転がる。

ハル どうした？

モモ 私の絵、へた？

ハル うん、超へただ！

モモ ……。

ハル どうした？

モモ へたじゃないもん、褒められたことあるもん。

私なんて取柄もないし、友達もいないし、

泣き虫だし、役に立たないし、

でも絵本だけは褒められたもん！

私には絵本しかないんだもん！

モモ、大声でワンワン泣き出す。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

モモ ……。

ハル 泣きやんだか？

モモ なにその歌？

ハル 魔法の歌。これを歌うと、みんな笑顔になるんだ。

お母さんが教えてくれた。

モモ (泣きながらも笑顔になって) 素敵な歌だね。

ハル 笑顔になった。

モモ ハルちゃんは魔法使いだね。

ハル 今さら気づいたのか。

(腕にしているポロポロの紐でできた腕輪を見せる)

これ、お母さんがあたしにつくってくれた魔法の腕輪だ。

これをつけてるといいことがある。

モモ すごいね。

ハル まあな。

モモ ねえハルちゃん、

私、すぐ泣くし、絵もヘタだけど、

……ううん、なんでもない。

ハル なんだ？

モモ だって、なに言ってるんだって、思われるから。

ハル 言いたいことは言ったほうがいいぞ！

モモ ……友達になって。私と、友達になって。

ハル ……なに言ってるんだよ。

モモ ……。

ハル もう友達だろ。

モモ、泣いてしまう。

ハル 悲しいのか？

モモ ううん、悲しい涙じゃないよ。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

モモ、笑う。

モモ 私達、ずっと友達？

ハル ずっと友達だ！

ふたり ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

音楽。

2. 誘拐

モモが語る。

モモ こうして私は、ハルちゃんとお友達になりました。

ハルちゃんたちにはおうちがなかったので、

いつも木の下で眠っているそうです。

ハルちゃんは、妹のアカリちゃんと暮していました。

アカリは、木の陰からモモを見ている。

モモ アカリちゃんは、恥ずかしがり屋のようです。

ハルちゃんはどこからともなくパンを出してくれるので、

食べ物には困りませんでした。

妹のアカリちゃんですえ、ハルちゃんがどこから

パンを持ってきているのか知らなかったので、

ハルちゃんは本当に魔法使いなのかもしれないな、

そう思いました。

片目に眼帯をしているユウタがやってくる。

ユウタ おはよう、ハルちゃん。

ハル わ、ユウタ！

モモ この人はユウタくんです。

よくハルちゃんのとこに遊びに来ていてるそうです。

うまれつき片目が見えないそうなのですが、

絵を描くのが好きで、

将来は画家になりたいと言っていました。

ユウタのスケッチブックを見ているハル。

アカリは木の陰からユウタのところに走ってくる。

アカリ あの、ユウタさんって本当に絵うまいですね。

ユウタ ありがとう。

アカリは木の陰に戻る。

モモ 私の予想が正しければ、

たぶんアカリちゃんはユウタくんのことか、

……とても気になっています。

私は、密かにアカリちゃんを応援しています。

ハル ユウタ、モモは絵がヘタだから、

かわりに描いてあげなよ。

モモ ハルちゃんは言い方がまっすぐだね。

ユウタ 絵描いてるんですか？

モモ 絵本描いてるんだけど……。

ユウタ 絵本。素敵ですね。

モモ ほんと？

実はこれから新しいのを描こうと思ってるんだけど。

ユウタ 僕でよければ、なにか手伝いますから。

モモ ありがとう。

アカリ ユウタさん、あの、よかったら、

今日は私を描いてくれませんか？

ユウタ え？

モモ 描いてあげなよ。

ユウタ うん、いいよ。そうだ、ハルちゃんも。

ハル なんだ？

ユウタ 今日は二人を描くよ。

ハル おう、ほんとか！

ユウタ そこに並んで。

ハル おう！

ユウタ、スケッチブックを広げて描き始める。

ハル なあ、ユウタはどうして片目なのに絵がうまいんだ？

アカリ 姉ちゃん。

ユウタ ハルちゃん、

僕は片目に生まれてきてよかったと思ってるよ。

だってそれって、僕にはほかの人と

違うように世界が見えてるってことだろ。

だから僕は、僕にしか描けない絵を

描くことができるはずなんだ。

母さんが僕にそう教えてくれた。

ハル ふーん。

アカリ それ、素敵ですね。

ユウタ ありがとう。

絵を描いているユウタ。

ユウタ ハルちゃんを見ているとお母さんを思い出すよ。

ある日、急にいなくなっちゃったんだ。

とつても明るくて優しい人だった。

ハル いいやつだな！

ユウタ 顔も似てる。お母さんとハルちゃんはそっくりだ。

ハルちゃんも明るくて優しい。

ハル まあな！

ユウタ ハルちゃんって、目がきれいだよな。

ハルちゃんの目を見ると、なんだか嬉しくなる。

ハル そうか、よかったな！

アカリ、木の陰に隠れる。

ユウタ どうしたの？

アカリ 私、やっぱりいいです。

ユウタ いいの？

アカリ お姉ちゃんだけ描いててください。
ハル まかせとけ！

アカリは去って行ってしまふ。

モモ もう、鈍感なんだから！

ユウタ え？

モモ 行くよ！

ユウタ 僕ですか？

ハル あたしも行く！

モモ ハルちゃんはここで待ってて。

ハル なんで？

モモ 描いてもらうポーズ考えてるの。

ハル わかった！

モモ、ユウタの手を引いて、アカリの去った方に向かっていく。

ハル、いろんなポーズを考えてみる。

腕輪を外して、手に持ったようなポーズも考えてみる。

物陰から、ケイがこっそり現れる。

ケイ おう。

ハル わ！ 誰だ？

ケイ だ、だ誰でも、い、い、いいだろう。

ハル わあ。

ケイ、ハルの手を引っ張り去っていく。
ハルは腕輪を落としていく。

モモとアカリ、ユウタが戻ってくる。

モモが戻ってきたながら泣いているアカリに話している。

モモ ほーら、機嫌直して。

ユウタ くんに絵かいてもらおう。ね？

ユウタ なんかごめん。

モモ あれ？ ハルちゃん？ ハルちゃん？

どこ行ったんだらう？

アカリ 姉ちゃんのことだから、

どうせバツタでも見つけて追いかけてるんですよ。

モモ だといんだけど。あれ？

モモ、ハルの腕輪を見つけて、拾う。

モモ これって。

アカリ お母さんがお姉ちゃんにあげた腕輪……。

モモ ……。

アカリ モモさん？

モモ ……ちよつと、さがしてみよう。

私、海岸に行ってみる。

ユウタ あ、でも、僕そろそろ帰らないと。

モモ わかった。アカリちゃんもどっかさが見よう。

アカリ はい。

モモ 見つかったら、またここに集まろう。

ユウタ くん、またね。

ユウタ はい。

モモは去っていく。

ユウタ じゃあ。

アカリ ユウタさん。

ユウタ なに？

アカリ ……ううん、なんでもありません。

ユウタ うん。

アカリ、去っていく。

ユウタも去っていく。

森の奥。

ケイとハルがやってくる。

ケイ く、くくくそ、どど、どどだ、こ、こは。

ハル お前、道にまよったのか？

ケイ ち、ちち違う、よよ寄り道して、してる、だ、だけだ。

ハル ふうん。

雨が降ってくる。

ハル あ。

ケイ あ、ああ、くそ。ここ、こんなときに。

あ、あ、あそ、そこにほら、洞穴が、あ、ある。

あ、あ、あま、雨宿りだ。

ハルとケイ、去っていく。

アカリたちがいた場所。

アカリとモモが戻ってくる。

雨は降り続けている。

モモ いた？

アカリ ううん。

モモ どこ行ったんだらう。

アカリ、くしゃみする。

モモ 大丈夫？

アカリ はい。(鼻水をすする)

風邪ひいたかもしれない……。

モモ とりあえずこの木の陰で雨宿りしよう。

アカリ はい。(鼻水をすする)

モモ ……どうしよう、

もし悪い人にさらわれたりしてたら……。

そしたら、私のせいだ。

私がハルちゃんだけ置いてったから。

アカリ 考えすぎです。

モモ ……やっぱり、もう少しさがしてみる。

アカリ 戻ってきますよ。

モモ でも、もう少しだけ、

アカリ 行かないでください。(鼻水をすする)

モモ ……。

アカリ そこまでしなくていいです。

モモ でも……友達だから。

アカリ 私、お母さんに言われたんです。

そんなに暗かったら誰も友達になってくれないよって。

姉ちゃんは友達できても、あんたはできないよって。

モモ ……。

アカリ こんな私にも友達ができたと思ってたんです。

……でも、それって私がそう思ったただけですか？

私とモモさんは友達じゃないんですか？

モモは黙ってしまいが、少ししてアカリを抱きしめて、

モモ 友達だよ。

アカリ ……。

モモ ……ごめん、でも少しだけさがしてみる。

アカリ、行こうとするモモの腕をつかむ。

モモ、ゆっくりアカリの手を離して、

モモ すぐ戻るから。

モモ、去っていく。

洞穴の中。

ハルとケイが雨宿りしている。

ケイ い、い、いつやむんだこの雨は。

ハル なあ、お前誰だ？

ケイ お、お、俺は、ケ、ケケイ。

ハル ケケイ？

ケイ ち、ち違う、ケ、ケイ。

ハル ケケイ？

ケイ ば、ば、ばかにするな。

お、お、俺はつつ強いんだ。

ハル あたしはハル、よろしくな！

ケイ おおお前は、きよきよ今日から、

おお俺のめめ召使いだ。

ハル 召使いつてなににするんだ？

ケイ おお俺の世話をしたり、

よよ夜は、おとお前のかか体を、

もももてあそんでやる。

ハル 遊んでくれるのか？

ケイ、ハルの腕をつかんで、拳をふりあげる。

ケイ ふ、ふ、ふざけるのもいいいい加減にしろ。

ハル なんだ、じゃんけんするのか？
ケイ くく、くそ！

ケイ、ハルの頬を殴る。

ハル、倒れる。

ケイ おお思い知ったか。

おお俺はつつ強いんだ。

ハル あはは、あはははは！

ケイ ……なんだ、なななにをわわ笑ってる？

ハル 生きてるって楽しいな。

たたかれたり、雨が降ったり、それでも笑ったり、楽しいな！

ケイ な、な、なにを言ってるんだ。

ハル (立ち上がって、違う方の頬を指差して) こっちもたたくか？

ケイ なななんなんだ、おとお前は！

ちちちくしょう、

おお俺がこここんなしや、しやべ、しやべり方だからって、

ばばばかにしやがって！

ケイ、また拳をふりあげるが、

ハルは笑う。

ハル あはは、あははは！

ケイ くそ、おお俺はばばかじゃねえぞ！ うう、うう、

ケイ、少し泣き出す。

それを見てハルは歌いだす。

ハル ♪泣いちやダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ケイ ……。

ハル お母さんが言ってた。

笑えば楽しいし、泣いたら悲しいぞ。

ケイ わわ笑えるわけがない。

村の奴らが言ったんだ。

お前は出来損ないだ、お前に構ってくれる奴は、

お前を見下して、憐れんでるだけだって。

みみみんなおお俺をばばかにして、

ただ誰もおお俺のこ、ことなんか、

みみ見てく、くれない、

ハル (じつとケイをみて) 見てるぞ。

ケイ ばばかにするな、

めめ召使いの、く、くせに、

ハル 召使いはやだ。友達だ！

ケイ と、とと、とともだち？

やややめろ、ししし信じないぞ。

ハル ♪泣いちやダメさ

二人 ♪いつも笑って 楽しく生きよう

ハル 楽しく生きよう。

ケイ 楽しく生きよう……。あれ？

ハル どうした？

ケイ 楽しく生きよう。楽しく生きよう。

ハル そうだ！

ケイ しゃべれる……。

雨がやむ。

ハル あ！

陽のさす方を見て、

ハル 晴れたな。

ケイ 晴れた。

モモの声がきこえる。

モモの声 ハルちゃん、ハルちゃん、

ハル モモの声だ！

ハル、行こうとする。

ケイ 待って。

ハル ？

ケイ 俺たち、友達なのか？

ハル さっき言っただろ。

モモがやってくる。

モモ あ、ハルちゃん、いた！

ハル よ！

モモ (ハルを抱きしめる) なにしてたの……心配させないでよ……。

ハル おっさんと遊んでた。

モモ おっさん？ (ケイに気づいて身構える)

ハル さつき、友達になったんだ。

モモ (ケイに) ……そうなんですか？

ケイ そ、そ、そうなんだ、

(喋り方が元に戻っていて) あ、あれ？

ハル モモはあのおっさんと友達になるか？

モモ え？

ケイ ど、ど、どうも、

モモ あ、あ、どうも、モモっていいます、

よろしく願います。

ハル このおっさんはケケイだ。

ケイ ケケイじゃなくて、ケイだよ。あ。

モモ ハルちゃん、アカリちゃんが風邪ひいたみたいで。

ハル そっか！ じゃあ帰るぞケイ！

ケイ うん。

三人はアカリのもとへ。

アカリ おかえり……。 (ケイを見て警戒して) ……誰？

ハル こいつはケイだ！ さつき友達になった！

アカリ アカリです。

ケイ どどどどうも。

アカリ (鼻水をすする)

ハル よし歌うぞアカリン。

アカリ え？

ハル ♪泣いちゃダメさ

モモとケイも歌う。

三人 ♪いつも笑って

アカリも歌う。

四人 ♪楽しく生きよう

ハル 元気出たか？

アカリ 治ったかも。

モモ 本当に魔法使いみたい。

ハル でも元気なさそうだぞ。

アカリ そんなことないよ。

ハル、また歌いだす。

ハル ♪泣いちゃダメさ

四人 ♪いつも笑って 楽しく生きよう

音楽。

第二幕

3. 金持ちの男

浜辺。

季節は変わり、少しだけ寒くなってきた。

ハル、アカリ、ケイ、ユウタがパンを食べている。

ユウタは途中から絵を描き始める。

モモが絵本を持って語り始める。

モモ それから少し時間が経って、

森も少しだけ寒くなってきました。

ケイもすっかり打ち解けて、

私たちとはふつうにしゃべれるようになりました。

私は新しい絵本を描くことにしました。

タイトルは「森のハルちゃん」です。

絵はユウタくんが描いてくれることになりました。

今日は、ハルちゃんに連れられて、

すぐそこにある海にやってきました。

ケイ きれいだな。

ハル お母さんとよくきたんだ。

モモ お母さんは今どこにいるの？

ハル お母さんお空にいるんだ。

ずっとあたしたちのこと見守ってるんだ。

モモ あ、ごめん……。

ハル お空に行くのはいいいことだぞ。

あたしもいつかお空に行って、
お母さんに会いに行くんだ。

ケイ (アカリに) お母さんってどんな人だったんだ？

アカリ とっても優しい人でした。

ハル アカリンには優しかったけど、

あたしはお姉ちゃんだからしっかりしなさいって

よく怒られてたぞ。

アカリンが泣いてたら甘やかすのに、

あたしが泣いたらメチャクチャ怒られたからな！

モモ そんなに怒られたの？

ハル まあな！ 鬼みたいだったぞ！

ユウタ (絵を描き終えて) モモさん、

こういう感じの絵でどうですか？

モモ わー素敵。

ハル さすがユウタだな！

ケイ これハルちゃんか？

ユウタ はい。

ケイ ちょっとかわいく描き過ぎじゃないか？

ユウタ そうですか？

ハル アカリンはいないのか！

ユウタ うん、このページには必要ないかなと思って。

ハル そうか！

モモ お金もおうちもないけれど、

私たちは毎日、笑いながらパンを食べて暮らしていました。

そう、あの人があるまでは。

ハル あ、

ヤナギとミーコが現れる。

ミーコは手袋をしている。

ヤナギ やあ、久しぶりだねハルちゃん。

ミーコ くっさ。

ハル おっさんだ、チヨコくれよ！

ヤナギ はいはい。

ハル 「はい」は一回。

ヤナギ はい。(チヨコをあげる)

ハル よし、帰っていいぞ。

ヤナギ まあ待ってくれよ。

この人たちにおじさんを紹介してくれよ。

ハル このおっさんはユウタのお父さんなんだ！

超金持ちだぞ！ よろしくな！

ヤナギ そう、俺の名前はヤナギだ。

覚えておいてくれ。

ミーコ ユウタの妹のミーコです。

モモ はじめまして、モモです。

ケイ ケ、ケ、ケケイです。

ユウタ なにしに来たんだよ。

ヤナギ 反抗期だねユウタくんは。

そんなにこいつらと一緒にいるのがいいのかい？

ユウタ ウチにいるよりずっといいよ。

ヤナギ さ、今日はそろそろおうちに帰って勉強しよう。

じゃなきや夕飯抜きだぞ。

ユウタ ……わかったよ。

ハル またな！ ユウタ！

ユウタ うん、またね、ハルちゃん。

モモ またね。

ケイ またな。

アカリ また……。

ユウタは去っていく。

ハル (ミーコが手袋をしているのを見て) ミーコは寒いのか？

ミーコ ミーコ、汚いものには触りたくないの。

ミーコはきれいだから。

ハル へえ！

じゃああたしは汚いから、

ミーコに触っちゃだめだな。

ミーコ 手袋の上からなら大丈夫だよ。

ハル ほんと？ じゃあ握手。

ミーコとハル、握手。

ハル ウンチついてるけど大丈夫か？

ミーコ きいやああー！

ミーコ、握手した手袋を地面に叩きつける。

新しい手袋を取り出し手にはめる。

ヤナギ どうしてウンチがついてるんだい？

ハル あっちの方でウンチしてたんだけど、ふくものなかった。

ヤナギ ハルちゃん、そんな人生はかわいそうだと思わないかい？

ハル 人生は楽しいぞ！

ヤナギ そうか。キミたちにひとつききたいんだが、

人生でいちばん大切なものって、

いったいなにかわかるかな？

ハル ……これだ！（腕輪を見せる）

ヤナギ なんだい、これは？

ハル お母さんからもらった魔法の腕輪だ！

これを持つているといいことがあるぞ！

ヤナギ （吹き出す）くくく、あはは、こりゃあいい！

最高だよハルちゃん！ あはははは！

ハル あはははは！

ハルが、みんなにも笑ってみせてくるので、みんなも笑う。

ヤナギ ハルちゃん、どうやらキミは

人生というものがよくわかっていないようだね。

ハル あたしバカだからな！

ヤナギ いいかいハルちゃん、これはみんな知っていることだから

よく覚えておいてほしいんだけどね、

人生でいちばん大切なものは金なんだよ。

ハル なんだ？

ヤナギ 金があればなんでも手に入るし、

金があればなんでも思い通りになるんだ。

つまり、幸せっていうのは、

金を持っているってことなのさ。

ハル へー。

ケイ そ、そ、そんなのはウソだ。

ヤナギ ウソ？ どこが？

ケイ か、か、金がなくても、し、しし幸せだ。

ヤナギ それは言い訳だよ。

本当は金持ちになりたいのになれないから、

自分に嘘をついて納得しようとしているだけさ。

モモ そんなことありません！

ヤナギ ……なんだい？

モモ ……お金で友達は買えません。

ヤナギ 買えるよ。なあ、ミーコ？

ミーコ ミーコ、お友達たくさんいるよ。

ミーコ、お金持ちだから。

モモ それは友達じゃないです。

ヤナギ なんの取り柄もない人間ほど友達とか愛とかいう

不確かなものを大切にするんだよ。

それくらいしかすがれるものがないからね。

違うかい、ケイ？

ケイ ち、ち、ち、

ヤナギ 違うないんだよ。

キミたちは金もなければ取り柄もない。

いわばなんの役にも立たないゴミなんだよ。

ケイ お、お、お前！

ケイ、ヤナギに殴りかかるが、ヤナギに腕をつかまれとめられる。

ヤナギ バカは言葉で勝てないと暴力で勝とうとする。

ヤナギ、ケイを振り払う。

ヤナギ お金は裏切らないが、友達も愛も、すぐに裏切るよ。

なあ、アカリちゃん？

アカリ ……。

ハル みんなは、裏切らないぞ！ 友達だからな！

ヤナギ ……今のうちはみじめな者どうしで

お友達ごっこをやっているといい。

いつまで続くか、楽しみだね。

モモ 行こう。

アカリ ……。

モモ 行くよ。

モモ、去っていく。

ハル じゃあな！

みんな去っていく。

ヤナギ ……そう、友達も愛も裏切るんだよ。

ヤナギは昔のことを思い出す。

音楽。

ミーコ むかしむかしあるところに、

ヤナギという男の子がいました。

ヤナギのおうちは貧乏でした。

ヤナギ ママ、お腹がすいたよ。

ミーコ「ごめんね、食べるものがないの。」

ヤナギ お腹すいたよ。

ミーコ「食べるものがないのよ。」

ヤナギ お腹すいた。

ミーコ「ないのよ！」

ヤナギ ごめんなさい……。

ミーコ「あなたはいっぱい勉強して、お金持ちになるのよ。

貧乏って、かわいそうっていう意味なのよ。

幸せって、お金があるっていうことなの。」

ヤナギ ……わかんない。

ミーコ「なんでわかんないのよ！」

ヤナギ、殴られる。

ミーコ「あなたは幸せになるのよ。絶対に。

ママとの約束よ。

♪ゆびきりげんまん嘘ついたら

げんこつ百発あげる 指切った

約束よ。」

ヤナギ げんこつ嫌だ……。

ミーコ 「約束だからね。」

ヤナギ うん……。

立ち尽くしている、ヤナギ。

ミーコ パパ？

ヤナギ ……。

ミーコ パパ？

ヤナギが気づくと、そこはヤナギの家。

ヤナギ ああ、どうしたミーコ？

ミーコ 考えごと？

ヤナギ いや、昔のことを思い出してただけさ。

ミーコ パパ、今日のミーコ、キレイ？

ヤナギ ああキレイだ。

この世の中は、キレイで美しいものだけ価値がある。

汚くて醜いものなんか必要ないんだ。あいつらみたいだね。

だから、ああいうゴミはお掃除しなきゃいけない。

あいつらのことは調べ尽くした。

さあ、お掃除の時間だ。よく見てくれ。

ミーコ 二度と立ち上がれないくらいコテンパンにしてね。

4. 作戦開始

森の夜。

アカリがいる。

ひとりで歌っている。

アカリ ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ヤナギ、拍手する。

アカリ、ヤナギに気づく。

ヤナギ やあ、アカリちゃん。

ミーコ どうも。

アカリ あ。

ヤナギ、チョコレートを出す。

ヤナギ チョコレート。

アカリ あ、ありがとうございます。

ヤナギ ほかのみんなはどうしたのかな。

アカリ 寝てると思います。

ヤナギ いつも夜になると歌ってるよね。

アカリ ……どうして知ってるんですか？

ヤナギ おじさんはアカリちゃんの歌が大好きなんだ。

こうやって何度もこっそりききに來るくらいね。

アカリ そうなんですか……。

ヤナギ アカリちゃんの素敵なお歌声を

もっとたくさんの人にきいてもらえないものかなあ。

なあミーコ？

ミーコ ミーコもそう思う。

ヤナギ そうだ、アカリちゃん、街に来ないかい？

アカリちゃんの歌声を街のみんなにきいてもらうんだよ。

アカリ え……。

ミーコ すごーい、街のみんなも大喜びだよ。

アカリ でも……。

ヤナギ 大丈夫、なにも心配いらないよ。

おじさんは有名な歌手とお友達なんだけどね、

その人の家に泊めてもらえるように頼んでみるよ。

きれいな服も用意するし、

ほしいものがあればなんでも買ってあげるよ。

アカリ ……でも、お姉ちゃんが……、

ヤナギ ああ、ハルちゃんのことか。

あのコは本当にずるいコだね。

アカリ え？

ヤナギ キミは、ハルちゃんに利用されているだけなんだよ。

キミはお姉ちゃんの引き立て役に過ぎないんだ。

ネクラのキミと一緒にいれば、

ハルちゃんは魅力的に見える。

お姉ちゃんはそのことがわかっていて、

ずっとキミと一緒にいるんだよ。

ミーコ ひど〜い。

ヤナギ ハルちゃんはみんなから必要とされているね。

でもキミはどうだろう。

アカリ ……。

ヤナギ (アカリの肩に手をのせて) おじさんは、

アカリちゃんのことを必要としてるよ。

そして、街のみんなも。どうだろう？

アカリ ……考えさせてください。

ヤナギ よし、じゃあみんなが起きてきたらきいてみよう。

それでいいだろう。

アカリ ……はい。

ミーコ パパは、どれだけアカリちゃんの歌声が素晴らしいか、

どれだけ街の人がアカリちゃんの歌声を

必要としているかを熱心に話しました。

朝になってみんなが起きてきました。

パパは、みんなを集めて、みんなの前でこう言いました。

ハル、モモ、ケイが集まっている。

ヤナギ みんな、アカリちゃんは歌をうたうために

街に行くことになったよ。

アカリ え？

ヤナギ そうだよね、アカリちゃん？

ケイ は、は、はあ？

モモ (アカリに) どういうこと？

ヤナギ アカリちゃんはたくさんの人に必要とされているんだ。

だから街に行ってみんなに歌声を届けるんだよ。

もうこの森には戻ってこないかもしれない。

ケイ な、な、なに、

ハル そうなのか、アカリン？

アカリ えっと、

ヤナギ そうさ。なあ？ アカリちゃん。

姉ちゃんだってキミの夢を応援してくれるさ。

アカリ ……姉ちゃん、私、姉ちゃんのこと好きだよ。

でも、街には、私のこと必要としてくれる人がいるんだ。
もう、みんなとは会えないかもしれない。

ハル、ニコッと笑う。

ハル そうか、頑張れよ！ 応援する！

アカリン 歌うまいからな！

モモもケイも応援してるぞ！

モモ え、

モモとケイ、目配せする。

モモ うん、頑張つて！

ケイ が、頑張つて！

アカリ ……さよなら。

ヤナギ 大丈夫。アカリちゃんなら絶対成功するよ。
さあ、行こう。キレイな服を買わないとな。

アカリ はい、

ヤナギ じゃあねみんな。まったねー。

ミーコ まったねー。

ヤナギとミーコ、アカリ、去る。

モモ よかったの、ハルちゃん？

もうアカリちゃんと会えないかもしれないよ。

ハル うん、知ってる。

モモ ……。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう
三人 ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ミーコが語る。

みんなは去っている。

ミーコ アカリちゃんは街に行つて歌を披露しました。

街の人たちは珍しがってアカリちゃんの周りに
集まりました。

それ以来、アカリちゃんが歌うと、

たくさんの方が集まるようになりました。

パパは、今度はケイという男のところに行
くことにしました。

ケイとヤナギがいる。

ケイ なななんの用だ。

ヤナギ キミは誤解をしていると思うんだ。

ケイ 「ごごご誤解？」

ヤナギ 俺はキミの味方なんだ。

俺は、どうやったたら世界中の人が幸せになれるかを
ずっと考えているんだ。

ケイ うううウソだ。

ヤナギ ケイ、キミはその喋り方のせいで、

ずっと友達もできず、恋人もできたことがない。
そうだね？

ケイ ばばバカにしにきたのか？

ヤナギ 実はキミにぴったりの女を知っているんだ。

ケイ え？

ヤナギ 街にいる女なんだが、

実にかわいらしくて優しい女だ。

ケイ そそそんなやつはおお俺をすす好きにはななならない。

ヤナギ ところが、なにげなくキミのことを話してみたら、

キミの見た目も、性格も、声も、

そしてその喋り方さえも、

なにもかもそのコは興味を持ってくれたんだ。

ケイ うううウソだ。

ヤナギ 一度会ってみるか？

そうすればウソかどうかわかるはずだ。

ケイ ……。

ヤナギ そのコはキミと結婚したいとまで言ってくれているんだ。

ケイ け、けけ結婚。

ヤナギ そうだ。今まで考えられなかっただろう。

キミと結婚してくれる女がいるなんて。

ケイ け、けけ結婚か。

ヤナギ ただ、たったひとつだけ問題があるんだ。

ケイ なな、なんだ。

ヤナギ そのコの家は貧乏でね、

結婚式を挙げて、子供も産んで、

家族で生活していくとなると、

どうしても必要になってくるんだよ。金が。

ケイ か、かか金……。

ヤナギ 金のない人とは、どうしたって結婚できないんだ。

ケイ (泣くのをこらえながら) ……かか帰ってくれ。

ヤナギ 待ってくれよ。

言ったじゃないか、俺はキミの味方だって。

ケイ ……？

ヤナギ キミは金さえあれば結婚して、幸せになれるんだ。

俺に、手助けさせてくれ。

ケイ、ヤナギを見つめている。

ヤナギ キミに金をあげよう。

俺にとつては簡単なことだ。

ケイ ほほほ本当か？

ヤナギ ああ、本当だ。

ケイ ななななにを企んでいる。

ヤナギ キミの幸せを企んでいるんだよ。

キミが幸せなら俺も幸せだ。

ケイ で、でも、

ヤナギ ケイ、そもそもキミは、出来損ないなんだよ。

みんなお前を笑って、お前を見下している。

そんなお前に、こんなチャンスが二度と来ると思うか？

ケイ ああ、あ、あ、

ヤナギ チャンスを棒に振るな。

嫌ならこの話はもう終わりだ。

一生そうやって生きてるといい。(去ろうとする)

ケイ ああ、待って、待ってください！

ヤナギ ……。

ケイ お願いします！ 見捨てないでください！

お願いします！

ヤナギ 賢いね。俺は賢いヤツが大好きだ。

これでキミは素晴らしい人生を手に入れることができる。

さあ、街に行こう。

ケイ はい！

ミーコ こうして、ケイは街の女と会いました。

女は本当にかわいらしく優しいコで、

すぐに結婚が決まりました。

パパは、

最後にモモという女のところに行くことになりました。

舞台にはモモがいる。

ヤナギ キミは絵本を描くために家を飛び出したんだってね。

モモ まあ。

ヤナギ キミの気持ちはよくわかるよ。

俺も昔、画家を目指していたんだ。

でも俺の家は貧乏で、それを許してもらえなかった。

だから、キミには俺と同じ思いをしてほしくないんだよ。

モモ ……。

ヤナギ 街に有名な絵本作家がいてね、

その人のところで勉強してみないか？

お金は大丈夫、おじさんがなんとかするよ。

モモ 私は、絵本作家になんてならなくていいんです。

ヤナギ え？ なにを言ってるんだ。

夢を叶えるチャンスだぞ。

モモ 私も前まで思っていました。

将来は絵本作家になって、みんなに褒められて、

楽しく暮らすんだって。

でも、私はいまの暮らして十分幸せなんです。

ヤナギ キミは夢が叶ったときの幸せを知らないんだ。

こんなみじめな生活をして十分幸せだなんて

それは才能のない人が言うことだよ。

キミは違う。

キミは才能があるんだよ。

モモ 私には才能なんてありません。

ヤナギ 違う、もっと自分を信じるんだよ。

モモ 私がここを離れたら、

ハルちゃんが一ひりになっちゃいますから。

ハルちゃんと一緒にいられば、私、幸せなんです。

ヤナギ わかってないなあ。いいか？

キミはなんの取柄もないし、友達もないし、泣き虫だし、役に立たないし、

でも絵本の才能だけはあるんだよ。

そんなキミから絵本の可能性を取り上げたらどうなる？
そうだろ？

モモ ……。

ヤナギ だから、ほら。これがあればキミの人生は変わるんだよ。

キミの夢を叶えろ。な？（金を渡す）

モモ ……（金を捨てて）ハルちゃんが言ってくれたんです。

私達、ずっと友達だって。

ヤナギ ……理解できんね。

モモ あなたには一生理解できません。

モモ、去っていく。

ヤナギ 友達が金になるってのか！

金があれば、友達なんて掃いて捨てるほどできるんだぞ！

この役立たずが！

5. 街へ出た者の末路

河原。

ユウタとハルがやってくる。

ユウタはスケッチブックを持っている。

ユウタ この辺にしようか。
ハル いいぞ。

ユウタはスケッチブックを開く。

ハルはポージング。

ユウタ、ハルの絵を描いていく。

ハル、すぐに疲れてポージングをやめてしまう。

ユウタ ハルちゃん。

ハル 疲れた。

ユウタ それじゃあ絵が描けないよ。

ハル しょうがない。

ハル、またさっきと同じポージング。

ユウタ ……ハルちゃん、僕にはやっぱり

他の人には見えないものが見えると思うんだ。

うまく言えないんだけど、

奥に隠されたきれいなものっていうのかな。

ハル なにそれ？

ユウタ ほかの人にはハルちゃんが汚く見えるかもしれない。

だけど、僕の目には、はっきりと

ハルちゃんのきれいさが見えるんだ。

ハル ふーん、そうか！

ユウタ ハルちゃんはきれいだ。

ハル ……なあ、ユウタはどこにも行かない？
ユウタ ……。

ハル アカリン、どっか行っちゃった。ケイも。
モモはいるけどな。

ユウタ 僕はどこにもいかないよ。
ずっとハルちゃんの隣にいる。

ハル うん、よかった。

ユウタ うん。

アカリがやってくる。

昔よりキレイな服を着ている。

アカリ ただいま。こんにちは、ユウタさん。

ユウタ アカリちゃん。

ハル アカリン！

ハル、アカリに抱きつこうとする。

アカリ、よける。

アカリ ごめん、においうつるから。

ハル ……だな！

アカリ、ハルを見る。笑う。

アカリ ははは……、ははははは、

ハルも一緒に笑う。

アカリ 飽きられた。やっぱり才能なかったんだ、私。
ハル そっか。

アカリ ……幸せそうだね、ユウタさんと一緒にいて。
ハル あたしは幸せだぞ。

ユウタ ……。

ハル おかえり。

アカリ バイバイ。

アカリ、去ろうとする。

ユウタ アカリちゃん。

アカリ あ、今日からユウタさんのお宅におじゃまします。

ユウタ え？

アカリ よろしくお願いします。

アカリ、去る。

ユウタ なんか……、アカリちゃん、感じ変わったね。

ハル、アカリの去った方をずっと見ている。

ハル ……ユウタ、あたしもっとアカリンと話してくるな！

ユウタ あ、うん。

ハル、去る。

ユウタはスケッチブックを床に投げるように置く。

ヤナギ家。

ミーコが現れる。マスクやら手袋やらで完全防備。

ミーコは部屋中に霧吹きをかけている。

ユウタ ミーコなにしてんの？

ミーコ、ひたすら霧吹きをかけている。

ユウタにもかける。

ユウタ な、なんだよ。

ヤナギが現れる。

ヤナギ ただいま。

ユウタ ……お帰り。

ミーコ、ヤナギにひたすら霧吹きをかける。

ヤナギ うわ、なんだミーコ、

どうしてそんなに父さんをシュッシュユするんだ。

ほらほらやめて。どうしたのその格好は。

こんな手袋して。

ヤナギ、ミーコの手袋を脱がす。

ミーコ あ、あ……、

ヤナギ ほらミーコちゃん、おかえりは？

ヤナギ、ミーコの手を触る。

ミーコ きいやああー！

ミーコ、ヤナギから逃げる。

自分の手に水をかける。

ミーコ けがれちゃう、けがれちゃうよお……！！

ヤナギ どうしちゃったのミーコちゃん？

ミーコ ミーコ見ちゃったの、

夜トイレに行こうしたら変な物音が聞こえて、怖かったけど、パパの部屋を覗いたの。

そしたら、ベッドの上に裸のアカリちゃんもいて、

ユウタ (ヤナギを見る)

ヤナギ 違うよミーコちゃん。人助けなんだよ。

かわいそうなアカリちゃんに、

ぬくもりを分け与えていたんだよ。

ユウタ そんなだから母さんに逃げられたんだよ。

ヤナギ ……あ？

ユウタ そんなだから母さんに逃げられたんだよ！

ヤナギ、ユウタを倒す。

ミーコ きゃ！

ユウタ ……なんだよ、

ヤナギ この前、ユウタクんのスケッチブック見たんだ。

いやあ、びっくりしちゃったよ。

ハルちゃんの裸が描いてあるなんてね。

ミーコ、ユウタを見る。

ユウタ 勝手に見てんじやねえよ。

ヤナギ なんだお前。あの女脱がせたのか？

ユウタ イメージで描いたんだよ。

ヤナギ それでどうしたの？ 興奮したのかな？

てめえも十分けがれてんじやねえかよ。

ミーコ や、や、や……、

ユウタ ミーコ、違うよ、興奮なんかしてないよ。

ミーコ 近寄らないで、けがれる。あ、あ、あ……、

ミーコ、逃げるように去る。

ユウタ ミーコ違うよ、芸術なんだよ！

ヤナギ お前自分の目が特別だとか言ってたよな？

自分だけに見える世界？

自分だけにしか描けない絵？

(笑う) そんなもんあるわけねえだろ。

教えてやるよ。てめえの目はな、ただの欠陥なんだよ。

ユウタ うるせえ、俺にしか見えない世界があるんだよ！

俺にしか描けない世界があるんだよ！

そんなんだから母さんに逃げられたんだ！

ユウタは去っていく。

音楽。

ヤナギは妻と一緒にいたときを思い出す。

ハルが、ヤナギの妻・アンとして、客席に背を向けた状態で現れている。

アン ねえあなた。

ヤナギ なんだいアンちゃん。

アン 結婚式を思い出してたの。

ヤナギ ああ、盛大な結婚式だったね。

たくさん金をかけたからね。

アン あなた、本当の幸せって、なんだと思う。

ヤナギ 幸せっていうのは、お金があるってことさ。

お金があればなんでも手に入るんだ。

アン 私のことも、お金で手に入れたのかしら。

ヤナギ ……。

アン ユウタも、ミーコも、

お金で手に入れたと思っっているのかしら。

ヤナギ どうしんだよアンちゃん。

アン いいえ、なんでもないの。

少しお散歩に行ってくるわ。

アンは去っていく。

ヤナギ そう言ったきり、

アンちゃんはもう戻ってこなかった。

ヤナギは去る。

ユウタの部屋。

ユウタがぶつぶつ言いながらやってくる。

ユウタ 欠陥じゃない、特別なんだ……。

欠陥じゃない、特別なんだ……。

ごきげんなアカリがやってくる。

ユウタ アカリちゃん？

アカリ どうしたんだよユウタ。元気ないですよ。

ユウタ ……俺って絵を描く素質ないのかな。

アカリ あるよ！

ユウタにしか描けない世界がありまくるよ！

ユウタ アカリちゃん、なんか楽しそうだね。

アカリ ふふー、はい。

アカリ、ユウタにチョコを渡す。

アカリ これ、おじさんにもらったの。

人生が楽しくなるチョコレート。

本当はほかの人にあげちゃダメだけど、

おじさん、特別にユウタにあげてもいいって言ってたよ！

ユウタ そう。

アカリ ねえユウタ、チューしてあげよっか？

ユウタ え、なんで？

アカリ チューしたら楽しいよ。

ユウタ 楽しくないよ。

アカリ なんで？

チュー嬉しくないの？

おじさんはすっごく嬉しそうにしてくれるよ。

ユウタ、真顔でアカリを見る。

アカリ もー、そういう真面目な顔しちゃう。

ユウタももっと楽しく生きようよ。

ユウタ、首を横に振る。

アカリ なんでー？こんなに楽しいのに。

ユウタ 無理だよ。世の中悲しいことが多すぎるんだ……。

アカリ 悲しいことなんて見なきゃいいんだよ！

ほら、魔法の歌うたってあげる。

♪泣いちゃダメさ

ユウタ 魔法なんてないよ。

アカリ ねえ、あたしのチョコ食べてよ。

ユウタ、食べる。ユウタも陽気になってくる。

アカリ なあ？ 人生楽しいだろ？

ユウタ うん、楽しい！ なんか楽しくなってきた！

アカリ 生きるって楽し〜！

ユウタ 楽し〜！

アカリとユウタ、笑い続ける。

笑いながら去っていく。

街。

ケイが歩いてくる。

風が吹いてきたようで、少し震える。

ひとりごとを言っている。

ケイ ああ、いい匂いがする。パンの匂いだ。

森にいたときは毎日食べてたなあ。

……結局あの女は金が目当てだったんだ。

金がなくなったらすぐに捨てられた。裏切りやがった。

風が吹いてきて、震える。

ケイ 俺も裏切り者だ。女につられて森のみんなを捨ててきた。

もう森には戻れない。

ああ、美術館だ。

ここで風をしのがせてもらおう。

パンが懐かしいなあ……。

ケイは去っていく。

6. 究極の二択

河原。

食。パンを食べているハルとモモ。

ハルはうろろ歩いている。

ハル 遅いなあユウタ。

モモ 今日も来るって言ってたのにね。

ハル 今日もあたしの絵を描いてもらうんだ。

モモ 嬉しそうだね。

ハル まあな。

遠くから声が聞こえる。

ユウタの声 ハルちゃん！

ハル 来た！

アカリの声 ねーえーちゃん！

ハル アカリンもいる！

アカリとユウタがやってくる。二人とも陽気。

アカリ あ、モモさんだ、ちーっす！

ユウタ ちーっす！

ハル なんか楽しそうだな！

アカリ うん！ 生きてるって楽しいー！

ハル アカリンも生きてるのが楽しいって

思えるようになったんだな！

アカリ うん！ サイコー！

ユウタ サイコー！

モモ 大丈夫？

アカリ だいじょーぶ！

ユウタ だいじょーぶ！

アカリ、笑い出す。ユウタも笑う。つられてハルも笑う。

ヤナギが現れる。

ヤナギ あ、二人ともこんなところにいたのかー。さがしたよー。

アカリ やーん、さがされちゃったー。

ヤナギ 相変わらず楽しそうだね。

アカリ 超楽しい。

ヤナギ でもそんな楽しい二人に悲しいお知らせ。

あのチヨコ、もうなくなっちゃうんだ。

アカリとユウタ、青ざめる。

ふたりはヤナギに寄る。

アカリ チヨコ、チヨコもうないの？

ヤナギ そう、もうないんだ。

ユウタ チヨコ、チヨコ……。

ヤナギ 大丈夫！ おうちに最後の一個があるよ！

早い者勝ちだ！

最後の一個を手にするのはどっちかな！

アカリとユウタ、走り去る。

ヤナギは座る。

しばらく黙っている。

ヤナギ ……ハルちゃん、

あの二人はもう少ししたら死んでしまうんだ。

モモ え？

ハル ……。

ヤナギ 病気なんだ。ココロもカラダもボロボロさ……。

最後にはおかしくなってるね、

……そのまま死んでしまうんだ。

ハル、少し笑顔になる。

ハル 死んじゃうかー。

ハル、笑顔を残したままうつむく。

モモ どういうことですか……？

ヤナギ (少し笑って) でも落ち込む必要はないんだ。

おじさんはこの病気を治す薬をもってるんだ。

その薬をハルちゃんにあげよう。

ハル ほんとか！ くれよ！

ヤナギ そういってお願いをするときはな、

おでこを地面につけるんだよ。

ハル、しゃがんだままおでこを地面につける。

ヤナギ こうだよ。

ヤナギ、ハルに土下座の姿勢をとらせる。

ヤナギ 「お願いします。薬をください。」って言うんだ。

ハル お願いします。薬をください。

ヤナギ よしわかった。

ハル ほんとか！

ヤナギ うん。でも、タダであげるわけにはいかないな。

ハル じゃあどうしたらくれるんだ！

ヤナギ まずは一日だけハルちゃんのからだを貸してほしいな！

いやー晩！ 一晩だけハルちゃんのまたぐらを

貸してくれるだけでいいんだ！

ハル ……。

モモ (かばうようにハルの前に立って、ハルに) ……だめ。

ヤナギ じゃあキミが貸してくれるのかい。

モモ ……。

ハル、ニコっと笑う。

ハル あたしが貸したら薬くれるのか？

ヤナギ うーん、この薬はとても大切なものだからねえ。

それだけじゃあ釣り合わないなあ。

ハル あたしなんでもするよ！

おっさんはアカリンとユウタを救え！

ヤナギ、ニコっと笑う。

ヤナギ ……ハルちゃんの熱意には負けたよ。

ハルちゃんのためにオオマケにマケてあげよう。

ハルちゃん、おじさんの大切な薬と、

ハルちゃんの「大切な腕輪」を交換しよう。

ハル (腕輪を見て) これ？

ヤナギ そう。

ハル、腕輪をじっと見る。

ハル でも、お母さんの腕輪……、

ヤナギ そうかおじさんに腕輪をくれないのか。

じゃあ残念だけど、薬はあげられないなあ。

ハル、もう一度腕輪をじっと見るが、少して、

ハル わかった、

モモ (ハルの腕をつかんで) 待って。

ヤナギ ……どうしたの？ キミも貸してくれるの？

モモ はい、って言ったたら、薬はもらえるんですか？

ヤナギ、笑う。

ヤナギ なるほど、これが友情か。

ヤナギ、大笑いする。

ヤナギ いらねえよ。汚らしい。

モモ ……。

ヤナギ これでわかったかい？

友情なんてなんの役にも立たないって。

さあ、ハルちゃん。

腕輪、くれるの？ くないの？

モモ ……。

ハル ……しようがない、おじさんにこの腕輪あげる。

ヤナギ 本当かいハルちゃん！ よく決断したよ！

ハル、腕輪をヤナギに渡す。

ヤナギ ありがとう、これでこの腕輪はおじさんのものだ。

ハル 大事にしるよ。

ヤナギ ああ、大事にするよ！

ヤナギ、ハサミを取り出して、腕輪を切り刻む。

ヤナギ あー手がすべった！ ハルちゃんの大事な腕輪が！

あーあ……。

ハル ……。

ヤナギ ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

(笑う) 悲しむ必要なんてどこにもないんだよ！

だって、これはなんの金にもならないゴミなんだから！

こんなゴミと薬を交換してくれるなんて、

おじさんとってもいい人だろ？

ハル、しばらく切り刻まれた腕輪を見ているが、笑顔になって、

ハル いい人。

モモ、切り刻まれた腕輪を拾い集め始める。

ヤナギ さ、約束の薬だ！

これを飲ませて救ってあげるんだぞ！

ハル うん！

ヤナギ あ、

ヤナギ、ニヤッと笑う。

ヤナギ そうだ、おじさん大事なことを言い忘れていたよ。
その薬、一人分しかないんだ。

ハル ……。

ヤナギ だから、アカリちゃんとユウタ、

どっちか一人しか助けてあげられないんだ。

ハル ……。

ヤナギ どっちを助けるかはハルちゃんが決めるといいよ。

ハル ……。

ヤナギ ハルちゃん、これが人生さ。

何かを得るためには何かを捨てなければいけない。

誰かの幸せのために

誰かが犠牲にならなければいけないんだ。

わかるかい？

ヤナギ、モモが集めた腕輪のかけらを奪って、

地面に落として踏みつける。

ヤナギ こんなものは、人生でなんの役にも立たない。

ハル ……。

ヤナギ、笑う。

ヤナギ タイムリミットは3日間。

それを過ぎたらどっちも死んじゃうよ。

さあ、どっちを殺すか選ぶんだ。

アカリちゃんとユウタ、

ハルちゃんはどっちを殺すのかなあ？

ヤナギ、笑いながら去る。

モモ、しゃがんで悔し涙を流す。

モモ ごめんね、なんの役にも立たなくて……。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

モモ 無理だよ。

ハル ……なあ、モモだったらどっちを選ぶ？

アカリンとユウタ。

モモ ……。

ハル ……海。

モモ え？

ハル 海、行くぞ！

ハル、モモを連れて去っていく。

ヤナギの家。

ヤナギが帰ってくる。

ヤナギ ただいまー。

まったく、誰もいないのか。

ミーコがクッキーを持って後ろから現れる。

手袋とマスクをしている。

ミーコ おかえりパパ。

ヤナギ おお、ミーコちゃん。ただいまあ。

ミーコ この前は汚いなんて言っておめんなさい。

ヤナギ やっぱりミーコはパパが大好きなんだ。

ヤナギ ああ、そうかい。

ミーコ うん。

ヤナギ ミーコちゃん、もし自分の家族と、自分の好きな人、

どちらかひとつしか選べないとしたら、どっちを選ぶ？

ミーコ ミーコは、パパを選ぶよ。

ヤナギ じゃあ、ハルちゃんはどうかかな？

ミーコ どうかなあ？

ヤナギ パパはその答えが楽しみで仕方がないんだ。

ハルちゃんが、どっちを殺すのか。

そうだな、パパは、

ハルちゃんはきつと家族を殺すと思うな。

やっぱり好きな人にはかなわないよ。

まあ、どっちにしるハルちゃんは人殺しだけどね。

ミーコ ねえ。パパ、ミーコ、愛情たっぷりクッキー焼いたの！

大好きな。パパに食べてほしいな！

ヤナギ ああ、ありがとう。パパとっても嬉しいよ。

ヤナギ、クッキーを二つに割る。

ヤナギ 半分こだ。

ミーコ ……。

ヤナギ さあミーコ、一緒に食べよう。

ミーコ ミーコは食べないんだ。

ヤナギ どうして？一緒に食べたほうがおいしいよ。

ミーコ ダイエット中なんだ。

ヤナギ へえ、このクッキー何が入ってるのかなあ。

ミーコ ……愛情！

ヤナギ じゃあ、もったいなくて食べれないな。

ヤナギ、クッキーを返す。

ヤナギ ミーコ？パパのこと殺そうとしたな？

ミーコ してないよ！

ミーコのマスクやら手袋やらをとって、ミーコにべたべた触る。

ヤナギ なあ、ミーコ。パパは死んでほしいくらい汚いか？

ミーコ やだ、やだ、けがれる、けがれる、

ヤナギ ミーコちゃん、いいこと教えてあげる。

ミーコちゃんの身体に流れている血はね、

半分はパパの血なんだ。わかる？

ミーコちゃんは、生まれた時からけがれてるんだよ。

ミーコちゃんの半分は。パパなんだからね！

ミーコ ああ、ああ、ああ……、

ミーコ、逃げようとする。

ヤナギ 逃げられないよ。

どんなにがんばったって

自分のからだだから逃げられないよ！

ミーコ あああ……、

ミーコ、去る。

ヤナギ ああ……人生って楽しいなあ！（クッキーを叩きつける）

第三幕

7. ハルの選択

浜辺。

ハルが背中をむけて立っている。

モモが語り始める。

モモ ハルちゃんはずっと浜辺に立っていました。

夜が来ても、朝が来ても、

ずっと立っていました。

夜が来て、朝が来て、

夜が来て、朝が来て、

夜が来て、朝が来て、

……ハルちゃんは、ずっと眠らず、

一言もしゃべりませんでした。

ハル、ずっと立っている。

モモ ハルちゃん、

※無料版はここまでです。ご覧いただきありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

初版あとがき

この台本は2013年に上演した『汚姉妹』をリメイクしたものです。この作品が「劇団アトリエ」の最後の作品です。本当はもっと楽しく開放感のある作品を選んだ方がよかったですんじゃないかとも思ったのですが、タイトルも「おしまい」だし、この作品で終わりにするのも、この劇団らしくてよかったかなとも思います。

昔書いた作品をリメイクするにあたって、当時の台本を読み返したのですが、「当時の僕は、いったい誰に何の恨みがあつてこんなひどい話を書いたんだろう？」と首をかしげました。当時のことを思い出しても、別に誰かを恨んでいた記憶も、病んでいたような記憶もありません。ただひとつ、なにか行き詰まっていた感覚はあつたような気がしました。作品を作っているものにかうまくいかない。あまり評価されない。お客さんも集まらない。そういう不安を打開したくて書いた作品だったのかもしれない。『ダークな絵本』というコンセプトでしたが、最初の構想では、ラストは主人公のハルちゃんを夜空に星を降らせて、敵も味方も祝福するという希望のある明るい話をイメージしていた気がするのですが、当時の僕は「明るい話を書こうと思いましたが、無理でした。」と挫折しました。

リメイクにあたって、前半にモモとケイ（初演時は違う名前、キャラも性別も違いました）が仲間になる、というシーンが描かれました。見ての通り「友達」がメチャクチャ連発されています。僕の台本でこんなにも「友達」という言葉が出てきた作品はありません。書いていて、「自分の書いた台本じゃないみたいだ」と狂いそうになるほど抵抗がありました。

さて、人間の価値観はどこからやってくるんだろうか、というのが最近の興味です。どんな家庭に生まれたのか、どんな環境で育ってきたのか、どんな経験をしたのか、どんな人と出会ったのか、そういういろいろなものが関係して、価値観は作られていきます。この価値観というものは、自分で作っ

てきたものだ、という気がしてしまいがちですが、本当は外部のいろんなものによって形成されてきた価値観を、ただ受け入れている、というだけなんじゃないかと思えます。つまり、一見、自分は自分で価値観をコントロールして選んでいる、というように見えるかもしれませんが、実際は、価値観に自分がコントロールされているんじゃないだろうか、と思えます。ある価値観をものすごく強く信じている人間は、ほかの価値観を許容できなかったり、その価値観が崩されたときに、人生の意味を失ってしまうように思います。

「重要なのは愛か？ 金か？」みたいな議論があつたりしますが、当然、どっちもあるのが一番いいですよ。裏を返せば、別に金のために愛を捨てる必要もないだろうし、愛のために金を捨てる必要もないはずですよ。

ところが、どうしても金持ちになれなかったり、誰かに愛されると思えなかったりする人間はたくさんいます。そういう人間が嫉妬でもって「自分は金持ちでないが、そもそも金なんか持っても意味がない。愛さえあればいいんだ。金持ちのやつは哀れだ。」とか、「自分は誰にも愛されていないが、そもそも愛なんか必要ない。金が全てだ。愛が大切とかいつているやつは、現実が見えていない。」とか、自分の現状をなんとか肯定するために、他人を頭の中で蹴落としていくのです。いや、頭の中で思っているだけなら別にどうでもいいのですが、その価値観でもって、実際に周りの人間を攻撃する人間がいて、迷惑な話だと思えます。

そういった、恨みや嫉妬でつくりあげた「否定の価値観」は、人を幸せにしないかもしれません。否定を使わずに、なにかを肯定できるような「肯定の価値観」を持てると、幸せになれるかもしれません。「金持ちは金持ちで幸せかもしれないけれど、お金がなくても自分は幸せだなあ。」他人を蹴落とすんじゃない、ただ自分を肯定する。そのくらいでいいのかもしれない。

2016年9月14日（水） 小佐部 明広

再演あとがき

2013年に上演した『汚姉妹』。そのリメイクとして2016年に上演したこの『汚姉妹「呪われた少女」』が、2020年に「札幌演劇シーズン」というイベントで再演できることが決まった。このイベントは「過去に上演され高い評価を獲得した作品を再演する」というコンセプトのものなので、本作はありがたいことに「高い評価を獲得した作品」と認めていただいたことになる、ありがたい話だ。

再演にあたり、もう少し興味をひく導入にしたいと思い、シーン1のみ大部分書き換えた。他の部分はややカットしたり、すこし足したり、言い回しを変えた程度だ。それでも、少しだけ印象は違うかもしれない。

改めて、なぜこんなひどい話を書いたのかよくわからない。よくわからないが、そろそろ30歳になるこの時期に、あのとときの自分の感覚に触れられるのはいいことだと思っている。まだ守りに入るような時期じゃない、守るな、攻める、攻める、刺せ！

2019年11月11日（月） 小佐部 明広

《上演記録》

クラアク芸術堂 Masterworks#03 『汚姉妹「呪われた少女」』
（札幌演劇シーズン2020冬）

【キャスト】

ハル — 山木真綾（クラアク芸術堂）
アカリ — 橋田恵利香（劇団 Fireworks）／宮崎安津乃（劇団パーソンズ）
モモ — 脇田唯
ケイ — 隅田健太郎（Vhs・ソライロ）／丹生尋基（劇団ひまわり）
ヤナギ — 伊達昌俊（クラアク芸術堂）
ユウタ — 有田哲（クラアク芸術堂）
ミーコ — 小森春乃（劇団しろちゃん）／丸山琴瀬（Egg）

【スタッフ】

作・演出 小佐部明広
舞台 高村由紀子
照明 高橋正和
音楽 Saki
音響 小佐部明広
衣裳 佐々木青
小道具 佐藤理紗
宣伝デザイン むらかみなお
宣伝写真 たねだもとき（ピーナツバタークリエイト）
宣伝企画 鎌塚慎平
広報 山岸奈津子
制作 植津恵

【日程】 2020年2月 7日(金) 20時

2月 8日(土) 20時

2月 9日(日) 11時／15時

2月10日(月) 20時

2月11日(火祝) 15時

2月12日(水) 15時／20時

2月13日(木) 20時

2月14日(金) 20時

2月15日(土) 11時／15時

【会場】 扇谷記念スタジオシアターZOO

【料金】 一般 3,000円 学生 1,500円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

『汚姉妹』呪われた少女』の上演について』

「前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画運営委員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com

2016年12月12日 第1刷制作
2020年2月4日 第2刷制作

小佐部 明広 (こさべ あきひろ)

1990年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。2011年に「劇団アトリエ」を結成し、2017年に「クラアク芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。2017年から平仮名名義「こさべあきひろ」としての執筆活動も開始。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール2015優秀賞。

クラアク芸術堂ホームページ

<http://www.clark-artcompany.com>